

共生・公正・創造



東日本タイムズ号外

<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~JRTU-HWU/>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【シリーズ34】

迫り来る包囲網を前に再豹変？ 新戦略？ そして反戦平和活動は！

・講演で正義ぶる鉄面皮さ

しかし2002年7月10日の「旧役員慰労会」での講演（挨拶？）で、東京支社での人事発令に激怒し「俺は東京支社なんてチンピラを問題にしていない。松田出て来い、大塚出て来い、俺に文句があるなら堂々と来い。暗殺者を俺に送ってくるなら来い。」「東京地本の14日の大会までに、JRの本社の幹部が明確な方針を示さない限り、俺は東京地本大会でものごとをちゃんと言う。闘う方針を示しますよ。組織がぶっ壊されることを覚悟してやりますよ。」と言い、さらに「俺は順法闘争・ストライキに決起せよと言ったら、俺は従ってくると信じている。従ってくれなかったら、そこで俺は割腹自殺する。短刀持ってますからね。」とまで言っています。

もう一つは「会社に対する姿勢」の問題です。

大宮地本の7名の組合員が逮捕され、当時会社は「不当逮捕反対のスローガンが掲げられているところには参加できない」と、本部主催「スポーツフェスティバル」への出席見合わせや、地方本部大会への来賓参加を巡るトラブルなどがいくつかの地本でありました。そのような会社の姿勢に対して「会社は自分のことしか考えていない、会社がわれわれを守るなんてことはありえない」「7名逮捕されたって、ガサに入ったって、なにか見舞いの品でも持ってきたのか」「大弾圧を受けた本部に対して、立場が違おうとなんだらうと、大変でしたねと言うのがあたりまえだ」（2002年12月・新塾）と、会社を徹底的に批判していました。

ところが『セミナー』の講演では「会社の皆さんが『7人のいるところには参加できない。

裁判闘争の行方を冷静に見守る』といわれたそうですけれども、私はこれは間違っていないと思います。会社がそうやって否定したから会社は悪だ、という単純な一面的な見方というのは私は間違っていると思います。」と、180°転換しています。

そして最後に「『治安フォーラム』とかなんとかで松崎は横領だとか脱税だとか言っているらしい。いくらでもデッチ上げはできるかもしれませんが、事実ではないですから。」と、一言で片付けています。

私自身が多分に推測の部分があることも否定しません。しかし現在の東労組の現状にいてもたまらずペンを取りました。

前顧問を批判することは、北朝鮮において金正日を批判することと同様に非常に困難を極めます。このような限界の中での私の見解です。

前顧問や本部に対して疑問や批判をすることは「権力の手先」「組織破壊者」とされ統制処分の対象とされてしまいます。現に「除名処分」「組合員権停止」などの処分が発せられており、また「制裁審査」にかけられている組合員も多数おります。

このような組合にするために私は闘ってきたのではないのです。官僚化した本部役員は退陣し、フレッシュな指導部が一刻もはやく誕生する事を願ってやみません。

< 東労組の将来を憂う組合員 >

民主化の声・声・声・・・

2006. 1. 10 その34

(読んではいけない?) 「小説労働組合」の読み方! (14)

～佐藤正雄氏失踪事件と、さつき会経理偽装問題～



* 「今日の話を書くまで鈴木や田山や信越地本の連中は権力の手先だとか、盛んに大元が言っていたことを信じてきたが、どうやら大元が自分の悪事を隠したまま処理するための策略だったのかとの思いもしてきたよ」やがて還暦を迎える評議員が声を絞り出すように言った。「協会の福祉施設のことだけだな。噂では大元が国内外に、いくつかの別荘を持っていて泊まり歩いているという話を聞いていた。うちの組合の幹部は大元ぐらいになれば、いくつかの別荘を持つのは当たり前だと言っていた。彼ら幹部の感覚は私たちや組合員とは相当ズレていると思う。大元は一人の労働組合のリーダーにすぎない。その大元が、なんでそんな大金を持っているのか不思議だったんだ。今日の報告では国内の別荘のいくつかは協会の所有だと言っていた。組織の資金で建てて自分の所有にし、協会名にしてある別荘も自由に使っていたというわけか。謎が解けたと思った」「それは、今日の臨時総会開催の目的は警察の大元への疑惑をかわすためではないかと。大元の持っていた、いくつかの別荘もその疑惑の対称であったはずだ。そこで別荘は協会の所有で、あらかじめ誰でも使用できるようにと...」別荘をいつ建築したのか、どこで決めたのかな。単組の幹部であるオレたちだって知らないよな。協会の『誰でも使える別荘施設』というパンフが配られたが、オレは今日初めて見たぜ」みんなも同じだった。「これらの別荘は何処の総会で建設を決定したのかな」「組合員に不要な施設であることに違いはない」「疑問は次々に出て来る。大元の組織資金横領の片棒をかついで組合員を裏切る事だもの」・・・(p. 167～169)

東労組の組合員が配っている本であり、解説書まで出回っているわけであるが、告訴好きの団体のことを考え個人名は極力避けると、おそらくこの文脈の読み方は次のとおりであろう。

【総会でも意見を言わない自分たちの問題点は明らかだった。やがて還暦を迎える評議員が声を絞り出すように言った。「協会の福祉施設のことだけだな。噂では大元(M氏)が国内外に、いくつかの別荘を持っていて泊まり歩いているという話を聞いていた。うちの組合の幹部は大元ぐらいになれば、いくつかの別荘を持つのは当たり前だと言っていた。彼ら幹部の感覚は私たちや組合員とは相当ズレていると思う。大元は一人の労働組合のリーダーにすぎない。その大元が、なんでそんな大金を持っているのか不思議だったんだ。今日の報告では国内の別荘のいくつかは協会の所有だと言っていた。組織の資金で建てて自分の所有にし、協会名にしてある別荘も自由に使っていたというわけか。謎が解けたと思った」「それは、今日の臨時総会開催の目的は警察の大元への疑惑をかわすためではないかと...」】

小説があまりにもリアルなので解説の必要もないが、このころ、東労組元会長の松崎氏が、「福原や嶋田や新潟地本の連中は権力の手先だ」と、盛んに言っていたことは事実である。大元が自分の悪事を隠したまま処理するための策略だったのか? 民主化の声・声・声・・・ (続く)